

## 39 田代三喜の新発見の医書

### 『酬医頓得』の意義

○遠藤次郎・中村輝子・奈倉道治<sup>2)</sup>

演者らの一人、奈倉の家(名古屋市)に伝わる医書の中に、田代三喜の『酬医頓得』(以下、『酬医』と略す)がある。この医書はこれまでに研究されてきた三喜の書目にはなく、また、主要な図書目録の中にも見出だすことができない。したがって、これまでに知られていない田代三喜の医書である。

衆知の如く、田代三喜は後世派の開祖として重要な地位を与えられているが、不可解な面も多い人である。三喜の名を持つ人が、当時、何人もいたとの報告もあり、『酬医』に「三帰選」と記されていたとしても、これが田代三喜、その人によるものであったか否か、一応疑って見る必要がある。

演者らは田代三喜の医書と一般に認められている『三

喜十卷書』(『三喜廻翁医書』、近世漢方医学書集成卷一所収)と比較しながら、『酬医』について検討を加えた。

本書は縦二三・六糎、横一七糎、一六丁からなる書写本である。図には色が附されている。表紙の表題は『医頓得』とあるが、次頁の表題および本論の記述から、正式な名称が『酬医頓得』であることがわかる。この医書は奈倉家四代目、道博文閑(正徳四年生れ)が青年時代に京都に游学し、浅井凶南に師事したときに入手したものと推定される(奈倉家の家伝書)。

本書の内容を『十卷書』と比較すると、次ような共通点を見出だすことができる。

- 一 薬の名に特殊な造字(作字)が使われている。
- 二 田代三喜の医書には「当流」の名のついた医書(「当流和極集」など)が多いが、『酬医』の別名にも「当流」の名がつけられている(「当流極承」)。
- 三 「牛八二帰ス」という隠語が核心的な治療の記述の折に用いられている。

四 科疏の方式の表現がみられる。

以上の共通点のうち、一〜三は田代三喜に特有なもの

であり、他には見出だすことができない。これらのことから、『酬医』は田代三喜によるものであるといえる。おそらく本書は三喜の『十巻書』（現在のものは八部）の一部を構成するものだったのであろう。

『酬医』が書かれた時期に関しても、以下のように、ある程度の推測が可能である。

『酬医』では「次二十七一味ノ高劑、縮メテ三拾六味ト為ス」として、肺劑を一〇味、心劑を一〇味、脾劑を三味、肝劑を七味、腎劑を六味、計三十六味を挙げている。ここに記された「七一一味」は『十巻書』の「薬の部」にある、肺氣薬、一一味、治血薬、二二味、治脾胃薬、九味、治肝虫薬、一六味、治腎薬、一四味、計七一味に相当しており、『酬医』はこれから二分の一の頻用の薬物を採ったことがわかる。このことから、『酬医』は「薬の部」以降にまとめられたといえよう。

『酬医』において特に重要な点は、仏教医学に関する内容が豊富に盛り込まれていることである。地水火風空の五大に基づく一般的な仏教医学の説（五大説）も数多くみられるが、本書に特有な理論も多い。たとえば、患者の

「仏性」と医者が酒を酌み交わす（酬）ように、以心伝心で交流する方法を論じ、この方法が治療の一番の近道であると述べている。表題の『酬医頓得』はこのような内容を踏まえたものである。『酬医』の別名の『当流極承』も三喜の究極の医術を伝承する意と解され、彼の医術の神髄が本書の中に記されていることが窺われる。

これまでの研究では、田代三喜を明代の医学を日本に伝えた、後世派の開祖として位置づけている。しかしながら、本書にみられる田代三喜像は明らかに僧医としての姿である。三喜の死後に、曲直瀬道三をして『涙墨紙』を書かせるに至らしめたのも、また、後世、三喜の像が信仰の対象とされているのも、僧医としての田代三喜に對してであつたと演者らは推定している。

(1) 東京理科大学薬学部

(2) 奈倉産婦人科医院